

〈論 文〉

危機言語にみる変異と変化—ハイダ語（北米先住民諸語）の場合

Linguistic variation and change as observed in an endangered language: The case of Haida

堀 博文

Hirofumi HORI

キーワード 危機言語, 変異, 変化, ハイダ語 (北米先住民諸語), コミュニティー

要旨

北アメリカ北西海岸先住民諸言語の一つであるハイダ語は、現在では、話者がごく少数の高齢者に限られ、その存続が極めて厳しい状況にある。その背景には、白人がもたらした疫病への感染、白人文化への一貫した同化政策があり、これらの要因は、ハイダ語の世代間の継承にも著しい影響を及ぼしている。実際、現在のハイダ語の話者は、ほぼ全員が不完全な継承者であり、言語運用能力の差が話者の間に差異を生み出す一つの原因であると考えられる。そうした差異は、更に、ハイダ語の記述研究や復興にも障碍となっているが、一方で、近年とみに盛んになりつつある様々なハイダ文化復興の動きの中であって、ハイダ語は、コミュニティのメンバーがアイデンティティを認識するための核であり、また、コミュニティの間の連帯感を強める柱となっていることが指摘できる。

The present study describes some sociolinguistic facts, particularly around linguistic variation and change, observed in a speech community of the Haida language, spoken in the Haida Gwaii (or the Queen Charlotte Islands) off the northwest coast of Canada. Some of the linguistic variants found among present-day speakers in this community can be ascribed to incomplete transmission of the language between generations, caused by the rapid decline in population that happened from the middle of the 19th century to the beginning of the 20th. The educational system including residential schools and day schools also deprived the people of the opportunity to learn the language directly from their parents. This has led to a situation where speakers exhibit various degrees of linguistic competence, ranging from those who have a good command of the language to those who can say only a few phrases. The fact that present-day speakers have lacked the chance to learn the language from their parents has also caused major linguistic changes, by which present speakers have lost the grammatically complex forms that their parents used.

These linguistic variations and changes pose serious obstacles to efforts to

describe and revitalize the language. In fact, in terms of linguistic description, we always face difficulty deciding which speech forms we should pick up, the grammatically “degenerate” present forms or the grammatically correct “obsolescent” ones. From the perspective of language education, we can suspect that learners will inevitably be confused, encountering apparent inconsistencies in grammar due to these variations and changes.

In spite of linguistic variation and change among present-day Haida speakers, it should be pointed out that the Haida language still functions as the most effective means of enabling the people to recognize who they are and strengthens the solidarity of the community.

1. はじめに

本稿は、北米先住民諸語のひとつであるハイダ語 Haida（詳細は 2 節参照）とそのコミュニティにおいて観察し得た社会言語学的な事実、とりわけ話者の間にみられる変異、更に、言語変化を素描するとともに、その歴史的背景、また、それらに起因する調査上・復興上の問題点などをいくつか指摘することを目的とする。

2. ハイダ語の現況と歴史的背景

2.1 ハイダ語の現況

ハイダ語は、北米先住民諸語のひとつで、主にカナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸のハイダ島 Haida Gwaii¹⁾、アメリカ合衆国のアラスカ州南東部で話される系統不明の孤立言語である。方言は、(1) に示すように、まず北部方言群と南部方言群に大別され、それらは更にいくつかの下位方言に分かれる（括弧内の数字は、Krauss 1997 による話者の数である）。

(1) ハイダ語の方言区画（図 1、図 2 参照）

北部方言群：

アラスカ方言 (15)：ケチカン Ketchikan, ハイダバーグ Hydaburg（ともにアメリカ合衆国アラスカ州）

マセット方言 (30)：Masset（ハイダ島 [カナダ]）

南部方言群：

スキドゲイト方言 (10)：Skidegate（ハイダ島）

北部方言群のうち、アラスカ方言は、18 世紀初めに、ハイダ島北部から移住した人々によって形成されたものであり、近隣のトリンギット語 Tlingit から影響を受けていることから、特に語彙面において他の方言と著しく異なる。一方、南部方言群には、スキドゲイト方言に加え、ニンスティンツ Ninstints 方言がかつてあった。Swanton (1905a) によれば、ニンスティンツ方言とスキドゲイト方言の間には著しい差異があったが、その詳細が分からないまま、ニンスティンツ方言の

最後の話者が1970年に亡くなったことにより、南部方言群で現存する方言は、スキドゲイト方言のみとなってしまった。

北部方言群と南部方言群の違いは、音韻面と語彙面で最も大きいのが、形態統語面での違いはそれほど大きくなく、相互理解を妨げるほど著しいものではない。

(1)の括弧内の数字は、Krauss (1997)によって示された流暢に話せる話者の数であり、そのいずれもが当時で80歳代の高齢者である。そもそも何をもって「流暢に話せる」と見做し得るかが問題ではあるが(後述参照)、話者が少数の高齢者に限られるという事実から、ハイダ語は、いわゆる消滅の危機に瀕している言語のひとつであるといえる。

一方、カナダで話されるハイダ語(すなわち、(1)に示した北部方言群のマセット方言と南部方言群のスキドゲイト方言)については、2006年に行なわれたカナダの国勢調査による話者数の報告(Statics Canada 2007)がある。それによれば、それら両方言を合わせた話者数は190人であり、マセットに住む665人の9%、スキドゲイトに住む710人の9.2%がハイダ語の母語話者であると回答している。ここでいう「母語」とは、子供の頃に習得した第一言語で、今でも理解できるものをいうが、当然のことながら、クラウドが基準とした「流暢さ」を問うものでもなければ、また、その運用能力を問うものでもない。そもそも母語話者であることは、自己申告であるゆえに、どの程度話し理解できるかという点は、この数字からは窺えない。従って、クラウドのあげている両方言の話者数の合計40人よりも数字が大きくなることは十分あり得る。ちなみに、ハイダ語スキドゲイト方言の保存の中心的組織であるハイダ語プログラム Skidegate Haida Immersion Program(後述参照)によれば、スキドゲイト方言の「流暢な」話者は25名を数える(2013年6月現在)。

いずれの方言においても、その話者は、英語との二言語使用者であり、勿論、個人差はあろうが、日常的に使用するのは英語が優勢であることから、ハイダ語は、専ら限られた相手に対して、一部の機会でしか使われていないのが現状である。

以下、本稿で取り上げるのは、南部方言群のスキドゲイト方言である。

2.2 ハイダ語の歴史的背景

話者が少数の高齢者に限られ、その下の世代(すなわち、60歳代以下)は話すことはおろか、理解することもほぼ不可能に近いというハイダ語の状況は、その活力の尺度からみれば、極めて危険なものである。こうした状況に至ったそもそもの端緒は、いうまでもなく18世紀に始まるヨーロッパ人との接触である。ハイダ族が初めてヨーロッパ人と接触したのは、1774年であるが、初期は、探検家や交易関係者のみであったことから、ハイダ族との接触も一時的なものに過ぎなかった。しかし、それでも交易を通じて得た様々な物品(例えば、衣類、家具類、銃器、酒類など)は、ハイダ族の生活習慣を著しく変えるほど相当大きな影響を与えた。

その当時のハイダ族の集落は、現在とは違い、ハイダ島の至る所に点在していたことが記録により分かっている。ハイダ島の人口については、ハドソン湾会社 Hudson's Bay Company のワーク

John Work (生没年不詳) による記録 (1836~1841 年) が確認し得る最も古いものであると考えられるが、それによれば、ハイダ島には 6,693 人が住んでおり、その当時、ハイダ島全体で 12 の集落があったことが報告されている²⁾。

一説には、ヨーロッパ人と接触する以前のハイダ族の人口は、1 万人以上ともいわれるが、19 世紀末辺りから、急速に減少してしまう。ヨーロッパ人がもたらした疫病 (天然痘、結核など) がハイダ族 (のみならず、北西海岸先住民の諸族全般) の間に一気に広まったからである。例えば、1883 年から 1919 年までハイダ島のマセットで布教活動を行っていた、イギリス国教会の宣教師ハリソン Charles Harrison (生没年不詳) によれば (Harrison 1922)、1890 年前後のハイダ島には、すでにスキドゲイトとマセットの 2 つの集落しかなかった。それが事実とするならば、ワークの記録した時代からわずか 50 年足らずの間に、ハイダ族の人口が大幅に減少したことになる。実際、Duff (1997: 55) によれば、1895 年におけるハイダ族の人口は、663 人と推定されており、90% 近くの人口が減少した計算になる。疫病の中でも特に 1862 年に流行った天然痘が猛威をふるい、それが免疫を持たないハイダ族の多くの命を奪う結果となったのである。

それぞれの集落における人口の急激な減少は、集落の活力を奪い、社会構造を脆弱なものにしてしまった。ハイダ族の社会は、半族 moiety という 2 つの集団に分かれ、ワタリガラスの半族 *qayxil* とワシの半族 *qusdyaag* がある。それらの半族は、それぞれ別個の先祖に遡る単系出自の集団であり、自身がいずれの半族に属するかは、母親によって決まる。ハイダ族のほとんどの集落では、それら 2 つの半族が存在し、両者は、例えば、家の建築や葬儀、あるいは、ポトラッチと呼ばれる物品贈与の儀式などに際して協力し合う互恵的な関係にある。従って、そのような儀式が催される場合には、必然的に多くの人力を要したはずであり、また、半族 (更には、その下にある血族 lineage) の社会政治的な力を維持するにもそれ相応の人数が必要であった。しかし、疫病に起因する人口の大幅な減少は、そうした集団を維持することを不可能にし、結果的に、ハイダ島の北側にあった集落 (例えば、Yaku [yaak'u]³⁾, Kiusta [k'iwst'aa], Kung [qan], Yan [yaan], Kayung [q'ayaan], Hiellen [lʔyaalan] など) の住民はマセットに、一方、ハイダ島の南側にあった集落 (例えば、Haina [xaynaa], Chaatl [c'aaʔaʔ], Kaisun [qaysʔun], Cumshewa [lʔqinʔul], Skedans [q'unaa], Tanu [t'anuu], Ninstints [sgan gwaay 'lənagaay] など⁴⁾) の住民はスキドゲイトに移住せざるを得なくなった。この移住は、19 世紀末にはほぼ完了したとみられる (van den Brink 1974)。

人々の移住によって出来上がったマセットとスキドゲイトは、様々な集落の出身者からなるいわば混成集落であり、その混成的な性質は、言語の面にもいくらか反映されている。すなわち、「スキドゲイト方言」といっても、スキドゲイトで話される方言は、実は、均質ではなく、そうしたかつての集落で話されていた方言とみられる特徴が複雑に入り混じった結果できあがった混成方言であるといわれる (Levine 1977 参照)。この実態とそれに起因する様々な問題は、次節以降で取り上げる。

ブリティッシュ・コロンビア州全体をみても、疫病の蔓延によって減少した人口は、実は、1930 年代には大幅な増加に転じ、疫病が流行る前の水準にまで回復した。しかし、その頃には、

それぞれの部族にかつての活力はなくなっており、言語に関していえば、その衰退に歯止めをかけることができなくなっていた。その背景には、カナダ政府、あるいは、ブリティッシュ・コロンビア州政府による様々な同化政策⁵⁾があり、就中、学校教育は、先住民諸言語の継承に大きな妨げとなった。

学校教育の中心を担っていたのは、先住民にキリスト教を広めるためにヨーロッパから南北アメリカの各地に派遣された宣教師である。ハイダ族の間にキリスト教が広まったのは、1870年代であり、その約20年の間に宣教師の運営する通学学校 day school が設置された (van den Brink 1974)。更に、ハイダ族の子供たちの一部は、本土の寄宿学校 (多くは、ブリティッシュ・コロンビア州のチリワック Chilliwack 郊外のコクワリーツァ寄宿学校 Coqualeetza Residential School⁶⁾) に入れられた。

この寄宿学校は、ブリティッシュ・コロンビア州の先住民の子供を集め、英語教育と職業訓練を徹底的に施すことにより、先住民たちを白人社会に同化させることを主たる目的にしていたが、その実態は、子供たちを劣悪な環境に置き、教育というのは名ばかりの虐待が行なわれていたことが1990年代になって明るみになってきた。実際、寄宿学校に入るまで自分たちの集落や家庭で英語に触れる機会に乏しかった子供たちは、うっかり自分たちの母語を話すところを宣教師にみつかれば、筆舌しがたいほどの体罰を受けていたといわれる。子供たちは、そうした経験を繰り返すうちに、自分たちの母語を使うことを放棄し、学校を出た後も、母語は、その当時受けた様々な虐待を思い起こさせるものとして長く使うことをためらい、自身が家庭を持った後も、子供たちには英語で話しかけるように心がけていたという (寄宿学校の実態の詳細については、Nuu-chah-nulth Tribal Council 1996 参照)。

ハイダ族の高齢者で寄宿学校に行った経験のある人によれば、大体が9歳前後で親元を離れ、ハイダ島から遠く離れたチリワックのコクワリーツァ寄宿学校に入り、およそ5~6年間をそこで過ごしたという。その間、親元に帰れる機会もあったが、その往復の旅費は自己負担であり、しかも親が学校まで再度送り届けなくてはならないという厳しい規則があったため、蒸気船しか手段のなかった当時、自分たちの村に帰ることはほとんど不可能であった。

ハイダ族の伝統的な社会では、男子はある一定の年齢に達すると親元を離れ、母方のおじと生活を共にし、狩猟や漁労の技術、自分が所属する血族の様々な慣習などについて学ぶのが常であった。先に述べたように、母系社会のハイダ族において、自身が所属する血族は、父親のそれではなく、母親と同じであるため、その兄弟であるおじは、母親と同じ血族に属することになる。ハイダ族の子供が自身の父親ではなく母方のおじから生活に関する全ての知識と伝統を学ぶのは、そうした理由からである。

数年もの長い間、自分たちの集落から離され、寄宿学校での生活を余儀なくされるということは、子供たちにとっては、自分が本来学ぶべき技術や知識、習慣を身に付ける機会が奪われることを意味する。また、それだけの間、英語だけの生活を強いられていた結果、母語であるハイダ語を忘れてしまうこともあったようで、自分の村に戻ってきた時に周りの人たちが話しているハ

イダ語が全く理解できず、また、自身もハイダ語が話せなくなっているのに気づいて愕然としたという話を寄宿学校の複数の経験者から聞いたことがある。実際そうした人たちは、ハイダ語を取り戻すのに相当苦勞したという。

現在のハイダ語話者で 70 歳代から 80 歳代の人たちの両親の世代においてさえ、寄宿学校の経験者がおり、その家庭ではハイダ語が話されることはなく、むしろ両親は英語を使うことを積極的に奨励したそうである。従って、現在の話者の中には、ハイダ語を両親からではなく、その上の祖父母の世代から習得したという人もいる。こうしてみると、現在の話者たちが幼少の頃の 1940 年代辺りにおいては、親から子供へという本来あるべき言語の継承が失われつつあったことが窺える。

ハイダ語に壊滅的な打撃を与えたのは、寄宿学校だけではない。スキドゲイトに 19 世紀末に建てられた通学学校の教師たちは白人であったために、学校でハイダ語を話すことが許されず、英語の使用が強制された。すなわち、子供たちがハイダ語を習得する機会は、学校と家庭の両方において徐々になくなっていったのである。

ちなみに、家族形態について記しておく、Murdock (1934: 237) によれば、白人と接触する以前は、ひとつの家に 30 人規模の人が住んでおり、なかには 100 人を超える家もあるなど、一世帯当りの人口が多かった。その長は、*na 'lɔgaayga* (house be.master) “house chief” と呼ばれ、その配偶者（複数もあり得る）、息子と未婚の娘、既婚の娘とその配偶者と子供、甥（姉妹の子供）などが共に住んでいた⁷⁾。しかし、上に述べたような疫病の流行によって人口が激減してからは、一世帯当りの人数も少なくなり、更に、白人の習慣に感化して家の構造が白人のそれのように変化したことで家族の小規模化（核家族化）が急速に進んでいった（参考：van den Brink 1974）。また、その背景には、家族の小規模化を促す宣教師の影響もあった（参考：Blackman 1982）。家族が小規模化したことは、子供がハイダ語を習得する機会の減少を意味し、言語の継承にも大きな影響を与えたことが容易に想像し得る。

こうしてみれば、現在の話者は、程度の差はあるものの、概して言語を継承する際に相当な困難を伴っていたことが窺い知れる。更に、話者によっては、非ハイダ族と結婚したり、ハイダ島以外の土地へ移住したりしたために、特に大人期においてハイダ語を話す機会がなくなってしまう人も多い。現在のハイダ語の話者の多くは、Sasse (1992) のいう “forgetters” といわれる部類に属するとみられ、その上の世代の話すハイダ語と比べて、彼らの話すハイダ語は、いろいろな変化を被っていると考えられる（次節参照）。

3. ハイダ語スキドゲイト方言にみられる変異

先に述べたように、ハイダ語スキドゲイト方言は、もともとハイダ島の至る所に点在していた集落の出身者が集まってできあがった混成方言である。その移住は、100 年以上前に行なわれたにも拘わらず、いくつかあった変種がひとつに収斂することなくそのまま残り、現在の話者においてもいまだに微妙な変異が認められる。本節では、音韻面と形態統語面に分けて、それらの差

異をみてる。

3.1 音韻面における変異

音韻面の変異のうち代表的なものをいくつかのタイプに分けてみると、(2) に示すように、大体 [a] (*a*)*ay* ~ (*e*)*ey*; [b] *aw* ~ *oo*; [c] *g* ~ *k*'; [d] *ɠ* ~ *ʔ* ~ ' ; [e] 音節の脱落の 5 つに分けることができる (参考までに北部のマセット方言の形式を [] に入れて示す) ⁸⁾。

(2) ハイダ語スキドゲイト方言にみられる変異

[a] (*a*)*ay* ~ (*e*)*ey*

<i>gaay</i>	~	<i>geey</i>	[<i>gee</i>]	“that (indefinite)”
<i>gidaay</i>	~	<i>gideey</i>	[<i>ʔ^hidee</i>]	“about”
<i>hayluu</i>	~	<i>heyлуу</i>	[<i>hiiluu</i>]	“disappear”
<i>tay-</i>	~	<i>tey-</i>	[<i>tii</i>]	“classifier for house-like objects”

[b] *aw* ~ *oo*

=*dawga* ~ =*dooga* ~ =*dooʔa* [*diiu*] “or, if”

[c] *g* ~ *k*'

<i>sgu</i>	~	<i>sk'u</i>	[<i>sk'u</i>]	“whole”
<i>ʔak'uus</i>	~	<i>ʔaguus</i>	[<i>ʔaak'uus</i>]	“this”

[d] *ɠ* ~ *ʔ* ~ '

<i>q'algaad</i>	~	<i>q'alʔaad</i>	[<i>q'al'aad</i>]	“different”	
= <i>ga</i>	~	= <i>'a</i>	[<i>ʔ^haa</i>]	“at”	
<i>galgatyaan</i>	~	<i>gəlʔatxyaan</i>	~	<i>galgatʔyaan</i> ~ <i>gəlʔatʔyaan</i>	[<i>galgatʔyaan</i>] “abalone”

[e] 音節の脱落

= <i>kilgagi</i>	~	= <i>kilgi</i>	[= <i>kitga</i>]	“in the language of”
<i>k'yaatgi</i>	~	<i>k'yaat</i>	[<i>k'yaat</i> ~ <i>k'yaatga</i> ~ <i>sk'yaat</i>]	“everytime”

(2a) と (2b) は、母音に関する変異、(2c) と (2d) は子音に関する変異である。それらのタイプのうち、母音に関わる (2a) と (2b) は、おそらく一方の話者においてそれぞれ (*a*)*ay* > (*e*)*ey*, *aw* > *oo* と変化したことが予想される ⁹⁾。現在の話者においてこれらがどのように現われるかをみると、例えば、ある話者 A が *aay* と発音する形式に対して、別の話者 B が常に *eey* と発音するとは限らず、その現われは形態素ごとに決まっているものとみられる。すなわち、話者 B においても、例えば、*stlaay* “hand”, *dlaaylaa* “youth”, *gaaygwal* “hardly” などは、*eey* と発音されるわけではなく、*aay* と発音される。従って、*aay* が現われるか、あるいは、*eey* が現われるかは、予測不可能である。更に、場合によっては、A の話者も自由変異として *eey* と発音することもあるなど、それらの現われ方は一貫性を欠くところがある。

子音に関わる (2c) と (2d) は、いずれの子音も音素であるため、上に示したような変異は形態素ごとに決まっており、ある話者にみられるそれらの子音が常に他の話者で対応する子音として現われるわけではない。とりわけ (2d) に示した“abalone”の場合は、*g* と *ʔ* だけでなく、*x~ʔ~∅* といった、この語にしかみられない特殊な対応（最終音節の *xyaan ~ ʔyaan ~ yaan*）もあるなど、かなり複雑である。言い換えれば、これらの差異が語彙的に決まっていることを示すといえる。

こうした変異は何に起因するものなのか。その要因を探るための組織的な調査を行なったわけではないが、こうした変異を齎す要因として一般的に考えられる年代差、性差の違いなどは関わっていないとみられる。限られた話者の中で観察しただけではあるが、調査協力者の生年は大体ほとんどが 1920 年代とその前後 10 年の幅しかなく、いわばほぼ同世代の人たちと見做すことができ、また、男性か女性かによってある形式の現われに一定の傾向がみられるわけではないからである（実際、(2) にあげた形式は、男女の区別なく使われている）。

上に示したような変異が現われる要因として現在の話者が主張するのは、彼らが所属する血族の先祖がかつて住んでいた地域における方言的な違いである。しかし、そもそもそれらの地域の間にもどの程度の差異があったかは、記録がないために全く知る術がなく、その主張を支持する根拠は確かめようもない。もしそうであるとするならば、同じ血族に属する話者たちは、同じような方言的な特徴を示すはずであるが、実際には、同じ血族（更には、兄弟姉妹）であっても、必ずしも同じ変異を使うわけではない。逆に、異なる血族に属しながらも、同じ変異を使うことがある。勿論、現在の話者が幼少の頃に誰と生活を共にし、主に誰からハイダ語を継承したかによって、それぞれが使う形式が異なることはあり得る。しかし、それですべての差異が説明できるわけではない。上に示したような差異は、話者同士の間、あるいは話者個人の中で複雑に錯綜し合っているとみられ、かつての地域的な差異がそのまま反映されているとは考えにくい¹⁰⁾。尚、現在の話者は、スキドゲイトで話されるハイダ語にこのような差異があることを認識しており、一方で、ハイダ島のもう一つのコミュニティーで話されるマセット方言（上掲 (2) の [] に示した形式を参照）と自身たちが話すスキドゲイト方言の間には一層大きな隔たりがあると感じている。すなわち、このように顕著な差異があったとしても、「スキドゲイト方言」としての一体感をもっているのである。

こうした複雑な様相を呈する背景には、すでに述べたように、現在の話者の多くが、その生涯において常にハイダ語を使っていたわけではなく、人によって差はあるものの、ある一定の期間、継続的あるいは断続的にハイダ語を使っていなかったという事実があることを考えなくてはならない。すなわち、彼らのほとんどは、生涯のある時期において、一度話すことをやめたハイダ語を再び学び直す必要があり、その過程において、自分が子供の時に習得したそれとは違う形式を学んだ可能性も十分あり得る。彼らは程度の差こそあれ、そのほとんどが *forgetter* といわれる話者たちである。従って、学び直す際に、自分がかつて学んだ形式がどのようなものであったかが内省できるほど十分に記憶しておらず、無意識のうちにそれとは違った形式を学んだこともあったと考えられる。また、更に、現在の話者が互いに影響し合うこともないとはいえない（後述参照）。

尚、スキドゲイト方言にみられるこうした差異は、言語復興や言語学習においていろいろな難しい問題をもたらすことがあるが、この点については、4.2 で述べる。

3.2 形態音韻面における差異

現在の話者たちの間にみられる形態音韻レベルの差異の起因するところは、地域的なものではなく、形態音韻規則の適用の仕方であると考えられる。名詞を例にとってみれば、ハイダ語では、名詞は、譲渡可能所有 *alienable possession* を表わすものと譲渡不可能所有を表わすもの（親族名称と身体部位名称）に分けられ、前者は、所有構造において被所有者となる場合、あるいは、談話において既知であることを示す場合、限定接尾辞 *-gaay*（話者によっては、*-geey* であることもあり得る）が付加される。この限定接尾辞には、異形態として *-gaay* と *-aay*（あるいは *-eey*）の二種類があるが、いずれの異形態が用いられるかは、それが付加される名詞の末尾音によって決まる。すなわち、(3) に示すように（以下、*-gaay* で代表させる）、名詞の末尾が母音であれば、*-gaay* が現われ、同じく子音であれば *-aay* が現われる（各例の矢印の左側が基底形、右側が実際に現われる実現形である¹¹⁾）。

(3) 限定接尾辞の現われ

a. 母音終わりの名詞

<i>yanahuu-gaay</i>	→	<i>yanahuugaay</i>	“turnip”
<i>sabəlii-gaay</i>	→	<i>sabəliigaay</i>	“bread”
<i>lqyaama-gaay</i>	→	<i>lqyaamagaay</i>	“bull kelp”

b. 子音終わりの名詞

<i>k'aad-gaay</i>	→	<i>k'aadaay</i>	“deer”
<i>ŋaal-gaay</i>	→	<i>ŋaalaay</i>	“kelp”
<i>jigu lgaay-gaay</i>	→	<i>jigu lgaayaay</i>	“bullet”

すなわち、(3b) のような場合は、限定接尾辞の初頭子音 *g* を削除するという形態音韻規則が適用されて、矢印の右側のような実現形が得られる。しかし、現在の話者においては、その形態音韻規則が適用されずに、(3b) に対して (4) のような実現形がみられることもある。

(4) a. <i>k'aad-gaay</i>	→	<i>k'aadgaay</i>	“deer”
b. <i>ŋaal-gaay</i>	→	<i>ŋaalgaay</i>	“kelp”
c. <i>jigu lgaay-gaay</i>	→	<i>jigu lgaaygaay</i>	“bullet”

形態音韻規則という観点から見れば、(3a) のように限定接尾辞 *-gaay* をそのまま付加するのが単純な方法であり、どの場合にその初頭子音を削除するかということを考慮に入れなくてすむ。い

わば簡単な規則を一般化した結果、(4) のような形式が現われるようになったと解釈できる。

こうした単純な規則の一般化は、動詞において一層顕著にみられる。ハイダ語は、1 つの語に比較的多くの形態素を盛り込むことができる点で統合度が高い言語であり、形態素のつなぎ方という点からすれば、個々の形態素の境界がはっきりしているのも、膠着的なタイプの言語である。従って、それぞれの形態素が付加される際にも、あまり多くの形態音韻規則を必要とせず、異形態の数も少ない。

ハイダ語の形態素には、語根、接辞（接頭辞と接尾辞）があり、そのうち接辞は、名詞よりも動詞の形態法に関わるものの方が圧倒的に多く、それゆえ、動詞の方が名詞よりも複雑な構造をなす。動詞接辞は、更に、派生接辞と屈折語尾に分かれ、前者には、主に、語根に修飾を加えたり、語類を変換したり、あるいは、動詞の結合価を変えたりするものがあるのに対し、後者は、テンス・アスペクト・ムードを表わすものが多い。形態音韻的なふるまいからみれば、屈折語尾の方が時に複雑な規則を要し、従って、異形態の数も多い。特に、時制を表わす接辞は、それが付加される環境によって、いくつかの異形態が現われ、更に、それが付加される前の形態素にも形態音韻的な変容を与える。(5) に示すのは、過去時制を表わす接尾辞 *-gən* が付加された例である（上と同様、矢印の左側が基底形、右側が実現形である）。

(5) ハイダ語における動詞の過去形

a. <i>taa-gən</i>	→	<i>taagən</i>	“eat”
<i>sq'adga-gən</i>	→	<i>sq'adgagən</i>	“learn”
<i>naaŋ-gən</i>	→	<i>naaŋgən</i>	“play”
<i>tyaah-gən</i>	→	<i>tyaahgən</i>	“kill”
b. <i>sdiit-gən</i>	→	<i>sdilgən</i>	“return”
<i>niit-gən</i>	→	<i>nilgən</i>	“drink”
<i>tləŋsguut-gən</i>	→	<i>tləŋsgulgən</i>	“put away”
c. <i>qayd-gən</i>	→	<i>qaydən</i>	“leave, go”
d. <i>gaŋt'axid-gən</i>	→	<i>gaŋt'axiidən</i>	“(a group of people) move”
<i>tləlxid-gən</i>	→	<i>tləlxiidən</i>	“carry NP on vehicle”
<i>gid-gən</i>	→	<i>giidən</i>	“wait”
e. <i>gad-gən</i>	→	<i>gaydən</i>	“run”
<i>q'ud-gən</i>	→	<i>q'uydən</i>	“hungry”
f. <i>ʔis-gən</i>	→	<i>ʔiijin</i>	“be”
<i>sk'at'as-gən</i>	→	<i>sk'at'iijin</i>	“be crowded”

(5a) は、過去時制の接尾辞がそのまま動詞に付加された例であるのに対し、それ以外は、実現形を得るために、何らかの形態音韻規則を必要とする。その形態音韻的な変容をまとめれば次のよ

うである（それぞれの a~f は、上の (5) のそれに対応する）。

(6) a. 形態音韻的な変容なし。

- b. 動詞語根¹²⁾の *ii* を *i* にし、語根末尾の子音 *l* を *l* にする。接尾辞は変容しない。
- c. 動詞語根は変容しない。接尾辞の初頭子音 *g* を削除する。
- d. 動詞語根の *i* を *ii* にし、接尾辞の初頭子音 *g* を削除する。
- e. 動詞語根の短母音 *V* を *Vy* にし、接尾辞の初頭子音 *g* を削除する。
- f. 動詞語根の末尾子音 *s* を *j* に、また、その短母音 *i* もしくは *a* を *ii* にし、接尾辞の初頭子音 *g* を削除した上で、更に、その母音 *a* を *i* にする。

それぞれの形態音韻規則がどの環境で適用されるかについては詳述しないが、動詞語根と過去時制の接尾辞の異形態が現われる環境は決まっているので、予測することが可能である。しかし、現在の話者の中には、それらの規則を適用せずに、最も簡単な形式（すなわち **default** の形式）を用いる人もおり、(7) のような形式が実際に現われることがある（各例ひとつずつ示す。同様に a~f は、上の (5) (6) のそれに対応する）。

(7) a. <i>taa-gən</i>	→	<i>taagən</i>	“eat”
b. <i>sdiil-gən</i>	→	<i>sdiilgən</i>	“return”
c. <i>qayd-gən</i>	→	<i>qaydgən</i>	“leave, go”
d. <i>gənt'axid-gən</i>	→	<i>gənt'axidgən</i>	“(a group of people) move”
e. <i>gad-gən</i>	→	<i>gadgən</i>	“run”
f. <i>ʔis-gən</i>	→	<i>ʔisgən</i>	“be”

いずれの場合も動詞語根と過去時制の接尾辞の両方が基底形のままで現われ、(5) に示した形式に比べて相当単純化していることが分かる。しかし、一方では、(5) の形式を使う話者もおり、また、(7) の形式を使う話者であっても時として (5) の形式を使うことがあるので、その意味では、ある話者がいずれの形式を用いるのか予測できない。

この形態面における差異は、おそらく話者のハイダ語の運用能力に帰せられるものであろう。先に述べたように、ある一定期間、ハイダ語を使わない時期があれば、こうした細かな規則を忘れてしまうことは想像に難くない。そして、ハイダ語を改めて学び直した時に、複雑だった規則を単純化して習得することもあり得る。例えば、単純化した (7) のような形式を使う話者がハイダ語の再習得を試みたのは、ほとんどが成人してかなり経ってから（大体が 50 歳代から 60 歳代の間）であり、おそらくその頃には、誤用を指摘し、矯正してくれるような世代の人がほとんどいなくなっていたのであろう。尤も、その当時から文字言語としての習慣がハイダ語にあったとしたら、事情はもっと違っていたかもしれない。

話者の言語運用能力を測るのは極めて難しいことであるが、優れた話者ほど、長い話がよどみなく展開できる点がまず指摘できる。「よどみなく」というのは如何にも感覚的な表現であるが、例えば、文と文の間のポーズの置き方、イントネーションの付け方、リズムの取り方などは、簡単に習得し得ない音声的特徴であり、それらが巧みに使える話者は、それだけ言語運用能力が高いといえる。一方、言語運用能力が高くない話者の話すハイダ語には、どこことなくぎこちなさがあり、複雑な統語構造をもつ文（関係節や複文など）は、あまり出てこない¹³⁾。更に、上に述べたように、ハイダ語は、動詞に関わる接辞が多いという点で、動詞が比較的複雑な構造をなすが、言語運用能力が高い話者ほど、使える接辞のレパートリーが多く、その接辞をうまく使い分けることによって、微妙な意味の違いを表現することができる。それに対し、言語運用能力が低い話者は、使える接辞のレパートリーが少なく、多くの場合、個々の接辞の意味や機能を考えずに、他の要素と一緒に塊として覚えており、従って、たとえその接辞を知っていても、決まった環境でしか使えず、応用がきかないという傾向がみられる。但し、現在の話者をみる限り、言語運用能力と話者の年齢は、相関関係があるわけではない。実際、70代の話者の方がその年長者よりも言語運用能力が優れているということが実際に観察されるからである。

以上、ハイダ語スキドゲイト方言に限って、実際に見られる様々な変異を述べてきた。結局、これらの差異が帰するところは、話者のもつ言語運用能力の違いであり、その背景には、それぞれの話者において習得の空白期間があったことが指摘できる。こうした変異は、多かれ少なかれ、ハイダ語のように、日常的に使われることが少なくなっている、いわゆる危機言語に共通してみられるものであろう。また、歴史的に見れば、それらの差異は、現在の話者が所属する血族が本来居住していた地域の方言的特徴を幾分反映するのかもしれないが、それらの血族の間には威信の違いが多少あったことが指摘されるものの（例えば、Swanton 1905a）、言語面における威信の差はそれほど大きくなかったために、ひとつの共通語的な方言が形成されなかったと考えられる。

4. ハイダ語復興の取り組みとその問題点

1節で述べたように、ハイダ語は、現在、話者が少数の高齢者に限られ、その将来は決して明るいものではない。こうした状況の進行を少しでも遅らせるべく、現地においても、ハイダ語の保存と復興に向けた動きがみられる。本節では、その取り組みの概要を述べるとともに、その問題点をいくつか指摘する。

4.1 ハイダ語の復興

ハイダ語の復興が始まったのは、1970年代であり、その取り組みが最初に行なわれたのはアラスカ方言である。その成果は、辞書という形でLawrence (1977)としてまとめられ、そこで採用された文字の使い方（例えば、hlで側面摩擦音lを表わしたり、口蓋垂音を表わすために軟口蓋音系列に下線を付す[例：口蓋垂音のqをk̄で表わす]など）がハイダ語の他の方言でも使われる

など、ハイダ語の正書法の基礎となった。

スキドゲイト方言で復興の動きが具体的に現われたのは、1980年代に入ってからであり、まずは、学校（小学校から中等学校 secondary school）でハイダ語教育が導入された。更に、スキドゲイト方言では、復興と言語資料の集積の中心となるハイダ語プログラム Skidegate Community Immersion Program（のち、Skidegate Haida Immersion Program と改称）が1998年に始まった。ハイダ語プログラムは、復興への取り組みとして、語彙集の編纂、様々な教材やカリキュラムの開発、また、ハイダ語の授業を提供すると同時に、地名の保存や過去の様々なハイダ語の資料などの蓄積を図っている。

4.2 ハイダ語の記述の問題点

ハイダ語の復興には、当然のことながら、まずその言語の詳細な記述が必要である。しかし、スキドゲイト方言は、これまで述べてきたように、様々な差異が複雑に絡み合い、その捕捉が実に難しい。加えて、現在の話者の多くが幼少の頃に最初に習得した言語という意味でハイダ語が第一言語であるものの、その上の世代のように、常にハイダ語を使っていたわけではなく、今でも日常の生活のほとんどの場面では英語を話している。従って、彼らの話すハイダ語には、その前の世代のそれと比べて、いろいろな点で変化してしまっていることが認められる。そのうちのいくつかを指摘する。

ハイダ語には、過去の出来事を叙述する際、話者自身が直接経験したのか、それとも間接的に知っているのかという、いわゆる証拠性 *evidentiality* に基づく区別があり、それは、*-gaa* という屈折語尾の一種の有無によって表わされる。例えば、(8a) (9a) の述部には、この接尾辞が過去の接尾辞の前に現われ、その文で表わされる出来事が他者からの情報に基づくものであることを示す（この接尾辞が現われていない (8b) (9b) と比べられたい）¹⁴⁾。

(8) a. *ʔiisəŋ 'uu 'lə saawaagən*

//ʔiisəŋ='uu 'lə=suu-**gaa**-gən//

(again=FOC he=say-EVD-PAST) “He said again.”

b. *ʔiisəŋ='uu 'lə=suu-gən*

(again=FOC he=say-PAST) “He said again.”

(9) a. *t'anuu guy tl'ə sɖyaalaagən*

//t'anuu=guy tl'ə=sɖiil-**gaa**-gən//

(Tanu=toward they=return-EVD-PAST) “They went back to Tanu.”

b. *t'anuu guy tl'ə sɖilgən*¹⁵⁾

//t'anuu=guy tl'ə=sɖiil-gən//

(Tanu=toward they=return-PAST) “They went back to Tanu.”

この証拠性の接尾辞が付加された述部をみると、その接尾辞のみならず、動詞語根までが形態音韻的な変容を受けていることが分かる ((8a) の *saaw* [< //suu//], (9a) の *sdyaal* [< //sdiil//])。言い換えれば、この接尾辞を使うには、先にみた過去時制の接尾辞よりも複雑な形態音韻規則が更に必要であるということである。しかし、現在の話者では、この接尾辞で表わされる間接経験の過去がほとんど用いられず、すべて (9b) のような表現に統一され、直接経験と間接経験の過去の区別がなくなりつつある。

この接尾辞は、過去の出来事を表わす平叙文だけでなく、直接経験・間接経験を問わず、過去の疑問文においても使われる。例えば、

(10) a. *χaagaay gwaa da qyaŋaa*

//χa-gaay=gwaa da qin-gaa//

(dog-DEF=INTER you see-EVD) “Did you see the dog?”

b. *χaagaay=gwaa da qin*

(the.dog=INTER you see) “Do you see the dog?”

本来なら、疑問文における時制の区別は、この証拠性の接尾辞の有無によってなされるはずであるが、現在の話者の中において、特に、過去時制の接尾辞に伴う形態音韻規則を十分「習得」していない話者は、平叙文であれ疑問文であれ、証拠性の接尾辞を使うことがほとんどなく、過去の疑問文に対して (10b) のような文を使うことが観察される。すなわち、そのような話者においては、直接経験と間接経験の区別のみならず、疑問文の時制の区別までもが失われつつある。

更に、今の話者にみられる傾向として、テンス・アスペクト・ムードを表わす屈折語尾の省略があげられる。例えば、

(11) a. *stawjuu-gwaay=qawdi tləwaay=ga t'aləŋ sdiil*

(stroll-around=after.a.while the.boat=to we return)

“After strolling for a while, we returned to the boat.”

b. *ʔawəŋ dəŋʔad 'laa t'aləŋ qyaŋgagad*

//ʔawəŋ=dəŋʔad 'laa t'aləŋ qin-ga+gad//

(mother[REF]=with him we see-outward+run)

“We ran to see him with my mother.”

c. *gaay gu 'uu 'lə k'udʔul*

//gaay=gu='uu 'lə=k'udʔul//

(that=at=FOC he=die) “Then he died.”

上にあげた例の述部（下線部）は、本来、それぞれ、

(12) a. *sdilgən*

b. *qyaanɣagaydən*

c. *k'udʔulgən*

のように、屈折語尾の一種である過去時制の接尾辞 *-gən* (実現形は (12) の太字部分) を伴うべきであるが、実際には、(11) のように、過去時制の接尾辞が現われないことが多い。ただ、時制の接尾辞は常に省略されるわけではなく、現われる場合もあり、その現われが如何なる規則性に基づくものなのか、今ひとつ明らかにし得ていない。上に述べた過去時制の接尾辞に伴う形態音韻規則の簡略化や証拠性の接尾辞の消失の延長線上にこの現象を据えるならば、語尾の省略は、煩雑な形態音韻規則を避けるためのひとつの手段と捉えられるかもしれない。(11a) の動詞語根 (*sdiił*) と (12a) のそれ (*sdil*)、あるいは、(11b) の複合動詞の後項 (*gad*) と (12b) のそれ (*gayd*) を比べてみると、(11a) と (12a) の形式は、いずれも (11b) や (12b) のような過去時制の接尾辞が付加される際の異形態ではなく、基底形であることから、過去の接尾辞が付加される際の形態音韻規則が適用されていないことが分かる (但し、(11c) では、*k'udʔul* という、過去時制の接尾辞が付加される際の異形態が用いられており、やはり一貫性に欠ける)。

これまで述べてきたようなハイダ語の姿は、今の話者のひとつ上の世代 (すなわち、1900 年前後生まれ) に基づく Levine (1977) や Enrico (2003) では全く触れられておらず、更にその上の世代 (19 世紀半ば生まれ) を記録した Swanton (1905b) においても一切認められない。試みに現在の話者に、そうした先行研究にあげられているハイダ語の形式を聞いてみても、「聞いたことがない」「昔は聞いたことがあるかもしれないが、今では使わない」といった程度の反応しかない。それらに記録されているハイダ語の話者と現在の話者の間には、時間的にみれば、それほどの変異を生み出すのに十分大きな隔たりがあるとは思えないが、その変異は、やはり現在の話者が間断なくハイダ語を習得することができなかつた事実によるところが大きい。いずれにしても、今の話者にとっては、自分たちが使っているハイダ語こそ唯一のそれであり、複雑な規則を覚えて「本来の姿」に戻すことはないであろう。

問題となるのは、ハイダ語のどの姿を記述すべきかという点である。これまでみてきたように、話者の間には微妙な差異があり、また、先行研究で描かれているような姿ともかなり異なる。歴史的に「正しい」ハイダ語を記述すべきか、それとも、文法的に「崩れた」、しかも規則性を欠く現代のハイダ語を記述すべきかという問題は、この言語の記述に携わる者として常に悩むところである。

更に、ハイダ語の記述という点でいえば、話者の言語運用能力が実に様々であることも問題である。すでに述べたように、現在の話者は、そのほとんどがいわゆる半話者 *semi-speaker* である。勿論、半話者といってもいろいろなタイプや意味があり得るが (Campbell and Muntzel 1989, Sasse 1992 など参照)、少なくとも今の話者をみている限り、例えば、ある文 (あるいは表現) が文法

的に正しいかどうかを判断する際に、自身がその文を聞いたことがあるかないかをひとつの手がかりとし、たとえ文法的に正しくても、自身がその文を聞いたことがなければ誤りとすることがある。従って、話者によって容認度の判断が区々になることが多く、それがまたハイダ語の姿を捉えることを一層難しくしている。更にいえば、彼らのほとんどは、メタ言語が使えず、その点でいえば、言語協力者としては、十分な適性を備えているとは言いがたい。話者によっては、英語からハイダ語への翻訳が得意な人もいれば、知っている語彙が豊富でありながらも、それを使って文を作るのが苦手な人もいるし、自由発話はできるのに文法的な適格性の判断力に乏しい人もいる。そのそれぞれの「得意分野」をうまく活かして文法の記述を試みればよいが、実際には、上に述べたような差異があるために、結局得られるのは、モザイク模様の文法である。危機に瀕する言語の文法記述には、多かれ少なかれ、このような問題がつきまとうものなのであろう。

こうした問題は、研究する側だけでなく、ハイダ語スキドゲイト方言の保存の中心的な役割を担うハイダ語プログラムにおいても常にある種の障碍となっている。同プログラムには、現在、70歳代前半から80歳代後半までの十数名の話者が参加しているが、ハイダ語の運用面に関していえば、比較的流暢に話せる話者から決まった表現しか言えない話者までおり、更に、3節で述べたような変異が複雑に混ざり合っているなど、彼らの話すハイダ語は決して一様ではない。従って、語彙集を編纂する際にも、誰のどの形式を記載するかで大きくもめることが実際にある。そのため、例えば、(2d) に示したような“abalone”のハイダ語形は、現在確認し得るすべての形式を語彙集に載せることにしているが、それでもハイダ語話者の全員がそのプログラムに参加しているわけではないので、すべての形式を網羅することは事実上不可能に近い。同様に、上に述べた通り、文法面に関する判断は、話者によって区々であるので、一方の話者が正しいという形式を他方の話者が否定し、それが論争に発展することもある。結局、自分の話すことばこそ正しいと思いつくのは、どの言語の話者においても同じなのである。

ハイダ語にみられる細かな差異が学習者にも混乱をもたらすのは当然の帰結である。実際、学習者から「どれが正しいのか」と聞かれることが多々ある。そうした学習者の便宜を図って、いわゆる標準語らしき変異を作るのは現実的ではない。「標準語」と認められなかった形式を使う話者から必ず不満が噴出し、わだかまりが生じるからである。そのわだかまりは、ハイダ語プログラムだけでなく、スキドゲイト全体にまで広がるおそれがあり、特にこうした狭いコミュニティでは、ちょっとした失敗が大きなそれへと簡単に発展してしまうので、細心の配慮が必要である。

ハイダ語プログラムには、ほとんどハイダ語が話せない人も参加していると述べたが、そうした人々も子供の頃にハイダ語に触れる機会があったので、話す能力は不十分であっても、ハイダ語を理解する力は十分もっている。同プログラムは、そうした受動的な *passive* 話者の記憶を呼び覚まし、更に能動的な *active* 話者へとかえる可能性をもっている。実際、言語習得期の早い段階でハイダ語の習得をやめ、その後、長い間ハイダ語を使っていなかった人がハイダ語プログラムに参加したことによってハイダ語を取り戻し、流暢に話せるようになったという場合もある。た

だ、そうした話者は、子供の頃に習得した形式とは違う形式を、同プログラムに参加している他の話者から獲得することが多い。3.1 でみたように、様々な特徴が複数の話者にまたがってみられ、かつ、それが均一でないのは、こうした事情を反映しているものと考えられる。

5. コミュニティーにおけるハイダ語の働き

2006年のカナダの国勢調査によれば、スキドゲイトに住む710人のうち、ハイダ語を母語とすると回答したのはその9.2%、更に、家でハイダ語を使うと回答したのは4.9%であり、母語話者であっても、普段はハイダ語を使っていないことがこの数字から読み取れる。一方、ハイダ語の知識を有すると回答したのは14.1%にのぼり、それは、ハイダ語が自由に使えるほど習熟していることを必ずしも意味するものではないにせよ、人々のハイダ語に対する関心の高さを示すといえる。

とりわけ1998年にハイダ語プログラムが始まってから、スキドゲイトの至るところで、ハイダ語の道路名標識や看板などを目にすることが多くなり、それがまた人々のハイダ語への関心を高めるのに大きな役割を担っている。更に、学校に通う子供はともかく、同プログラムができてからは、それまでハイダ語を習う機会がなかった成人にもハイダ語の授業が提供されるようになり、以前にも増してハイダ語を学ぶ成人が増えた。加えて、同プログラムだけでなく、話者から一対一で学ぶ徒弟制 *apprentice* プログラムや保育園の子供とその親を対象にした教育プログラムができるなど、以前に比べてハイダ語習得の機会が充実しつつある。

ハイダ語プログラムが始まる以前は、ハイダ語が使われるのは限られた場（例えば、家族や身内だけの親しい間柄）だけであったと思われるが、最近では、ポトラッチなど重要な儀式において、その開始を告げるお祈りがハイダ語でなされ、更に、葬式では、「主の祈り」がハイダ語で唱えられるようになった。加えて、こうした組織ができたことにより、ハイダ語を普及させるという動きが活発になり、ハイダ語の象徴的な使用（上述の道路名標識や店などの看板・案内表示など）が村の一体感を生み出しているといえる。

こうしたハイダ語の使用は、人々に「自分たちが誰であるか」というアイデンティティーを呼び覚ますのに極めて重要な意義をもつ。勿論、ハイダ語だけがアイデンティティーの保持に役立つわけではなく、その他の様々な社会的・文化的環境が彼らのアイデンティティーを自覚させるのに十分な働きをもっているが、そうした中でもハイダ語がやはり中心的な柱であることは確かである。例えば、ハイダ族は、幼少の頃から、英語の名前だけでなく、ハイダ語の名前をもっており、その名前は、自身がどの血族に属するかを示す重要な指標である。しかし、ハイダ語が全く理解できない世代では、自分のハイダ名が正しく発音できず、その意味が分からないという者も結構いる。そうした事情から、自分の名前を正確に発音し、その意味を知るためにハイダ語を学び始めたという若者も実際にいる。先祖から受け継がれた名前の意味を知ることによって自分の血族の歴史を知り、自分をその歴史の中に位置づけることができるようになるのである。更に、ハイダ語を学ぶことにより、ハイダ族が培ってきた伝統的な知識が体系化されていく。ハイダ語

の習得は、彼らのアイデンティティーの認識と確立、更に、伝統的知識の習得に、実に計り知れないほどの意義をもつといえる¹⁶⁾。

6. 結語

ハイダ語スキドゲイト方言には微細な差異があり、彼らは、それを認識する一方で、スキドゲイトというコミュニティーに一体感を与えている諸要素の中心に言語があると強く感じている。

上に述べたように、ハイダ語は、決まった句以外は、日常の生活で使われることが少なくなってきたてきており、話者の数が減り続ける中においては、その傾向がますます強くなるであろう。ハイダ語は、少なくとも数年前までは、重要な儀式などにおいて、お祈り以外にスピーチでも使われることがあったが、ここ数年の間にそうしたスピーチができる話者が相次いで亡くなったために、最近では、ハイダ語の使用は、一定の型に即したお祈りに限られるようになってきた。それでも、そうした場においてハイダ語を使うことは、その儀式をより正式なものにするという一種の権威付けのような働きがあるように感じる。学習者が会話の習得よりも、お祈りやスピーチができるようになりたいというのもそういうところからきているのではないかと推察する。

その意味において、スキドゲイトにハイダ語プログラムがあるのは実に重要である。上述の様々な変異の問題や正書法の問題¹⁷⁾などがあるが、その活動によって得られた成果は、コミュニティー全体から高く評価されている。それには、高齢者を敬う彼らの習慣も与っている。実際、ハイダ語があまり話せない人であっても、同プログラムの一員であることは、そのプログラムの活動をコミュニティー全体に認めさせるのに大きな役割を担っている。コミュニティーのメンバーにとっては、ハイダ語プログラムの成果は、とりもなおさず、自分たちの *cinaay* 「おじいさん（呼称）」、*nanaay* 「おばあさん（同）」の努力の結果であり、外部者が作ったものとは明らかに受け取られ方が違う。そして、そうした事実がハイダ語スキドゲイト方言に、それとしての一体感（あるいは連帯感 *solidarity*）を与えることにつながる。

言語が単なる伝達的手段ではなく、それ以上の重要な機能を有することは、こうした危機に瀕する言語の話者とそのコミュニティーのメンバーの方が私たち言語研究者よりもはるかに深く理解している。それは、自分たちの言語が抑圧された苦難の歴史を知っている彼らだからこそ達し得た言語観である。私たちが彼らから学ぶべきことは多い。

註

¹⁾ ハイダ島は、18世紀後半にイギリス人の毛皮貿易商ジョージ・ディクソン George Dixon (1748~1795年)により、その船シャーロット号にちなんで、クイーン・シャーロット諸島 Queen Charlotte Islands と名付けられたが、2010年にブリティッシュ・コロンビア州政府の法律でハイダ語に基づく名称 Haida Gwaii が正式なものとして認められた。ハイダ語では、*xaayda gwaayaay* (*xaayda* 「人」; *gwaayaay* 「島」) という。Haida Gwaii という表記自体は、1980年代から島で用いられており、Gwaii という綴りは、おそらく Hawaii を擬したものであろう。日本では、「ハイダグワイ」という表記が使われているようである（例えば、『朝日新聞』2012年6月13日付朝刊の「ハーレーが漂着したカナダ・ハイダグワイ」）。

²⁾ Swanton (1905: 277ff.) には、1900年からその翌年の調査で得られた集落のリストがあり、全部で119の集落があ

げられている。但し、それらの中には、その当時すでに廃村となっているところもあり、また、それら全てがハイダ族の恒久的集落であったとは限らず、季節的に利用されていた一時的な集落も含まれているので、実際の集落の数はもっと少なかったに違いない。

³⁾ それぞれ英語化した表記と音素表記 (Blackman 1991, Enrico 1995 による。但し、多少改変を加えた) を示す。それぞれの集落の位置については図 2 参照。

⁴⁾ Swanton (1905a) によれば、これら南側の集落は、地理的な近さから、更に、次の 4 つのグループに分けることができる。すなわち、1) Skidegate; 2) Haina, Chaatl, Kaisun; 3) Cumsheewa, Skedans, Tanu; 4) Ninstints。これら 4 つのグループの間には、方言的な違いがあったとみられる (Swanton 1905a: 105) が、その詳細は不明である。

⁵⁾ 例えば、1876 年制定のインディアン法 Indian Act は、本来血族が管理・所有していた土地を分断したり、ポトラッチ (上述参照) を禁止したりする (1884 年の改正法) など、先住民の様々な習慣を根絶やしにしてしまった。

⁶⁾ 1889 年に設立されたメソジスト派 (後にカナダ合同教会) の学校。そこにはブリティッシュ・コロンビア州の先住民の子供たちが入れられたが、ハイダ族の子供が同校に初めて入ったのは 1900 年である (Morley 1967)。

⁷⁾ 尤も、上述のワークの資料を計算してみると、一世帯当りの人数は、13 人から 24 人程度であったようである。

⁸⁾ 以下、本稿におけるハイダ語のスキドゲイト方言の例は、次の話者から得たものである (イニシャルと生 (没) 年, 男女 [m/f] の別のみあげる)。GC (1911–2001, m), JC (1924, f), BH (1928, f), KH (1933, f), GJ (1929, f), RJ (1924, m), DM (1929, f), NP (1926–2012, m), WP (1905–2007, m), BR (1935, f), ER (1921–2010, f), GV (1938, f), EW (1913–2009, m), JW (1921–2008, m), AY (1924–2002, f), JY (1923–2008, m)。また、マセット方言の形式は、Enrico (2005) による (但し、表記は、本稿の記号に統一してある)。

ハイダ語スキドゲイト方言の音素目録は、次の通りである。b, d, g, ɡ, ʔ; (p), t, k, q; t', k', q'; s, l, x, ɣ, h; j [dʒ], c [tʃ], c'; dl, tl, tl'; m, n, ŋ; w, y, l; ʔ [ʔ]; ; i, (e), a, (o), u, ə。有声字は無声無気音、無声字は無声有気音を表わす。また、/ʔ/ は、ゆるやかな声立てを表わす。

⁹⁾ /e/ やその長母音 /ee/ [e:] の現われる頻度はかなり低く、/o/ とその長母音 /oo/ の頻度は一層低い。但し、eey を用いる話者が常に一貫して oo を用いるとは限らない。

¹⁰⁾ Dorian (1994) のいう “personal-pattern variation” を参照。但し、Dorian (1994) が扱うスコットランドの東サザランド・ゲール語 East Sutherland Gaelic における状況から得たその観察がハイダ語にどの程度当て嵌まるかは、更に考察が必要である。いずれも人口の比較的少ない、均質的な社会でありながらも、ここに述べたような、個人間あるいは個人内において変異がみられるという点では、ハイダ語と東サザランド・ゲール語は一致するものの、Dorian (1994) は、ゲール語優勢の話者がいた時代に得られたデータをもとにしている点、あるいは、ゲール語に標準語的な変種があること、また、放送においてゲール語が用いられていることなどがハイダ語とは異なる (現在のハイダ語話者は、英語優勢の二言語使用者である)。

¹¹⁾ (3) に示した形式は、限定接尾辞の付加に関わる形態音韻規則が一貫していた ER (1921–2010, m) から得たものである。

¹²⁾ ここでは話を簡単にするために、過去時制の接尾辞が動詞語根に直接付加される例のみをあげたが、実際には、動詞語根と過去時制の接尾辞の間に他の派生接尾辞や屈折語尾が現われることもあり、その場合も同様に、ここに示す規則が適用される。

¹³⁾ しかし、そういう話者であっても、ハイダ語を第二言語として学習している人たちと比べれば、ここにあげたような音声的な特徴をいくらか捕捉しており、単なる学習者とはまた違うことが分かる。ある一定の空白期間があったとしても、彼らは、「本物の」(すなわち単一言語使用者の話者) ハイダ語に直接触れていた時間が学習者よりも明らかに長く、「ハイダ語らしさ」をある程度身に付けているからである。

¹⁴⁾ 以下、形態音韻的な変容がみられる場合のみ、基底形を // // に示す (実現形はイタリックで示す)。グロスの略号は、末尾を参照。

¹⁵⁾ 話者によっては *sdüilgən* ということもある (上掲の (7b) 参照)。

¹⁶⁾ カナダのブリティッシュ・コロンビア州の先住民族の間では、刑務所から出所した先住民に、その出身のコミュニティで伝統的な知識を教えたり、儀式に参加させるという矯正プログラムが行なわれている。その中でも言語の果たす役割は大きく、言語の習得が自尊心の向上やアイデンティティの認識に効果をあげている。

¹⁷⁾ 正書法に関するいくつかの問題点については、堀 (2008) を参照。

参考文献

- Blackman, Margaret B. (1982) *During my time: Florence Edenshaw Davidson, a Haida woman*. Seattle: University of Washington Press.
- (1990) Haida: Traditional culture. In: Wayne Suttles (ed.), *Handbook of North American Indians, Vol. 7: Northwest Coast*: 240–260. Washington, D. C.: Smithsonian Institution.
- Campbell, Lyle and Martha C. Muntzel (1989) The structural consequences of language death. In: Nancy C. Dorian (ed.), *Investigating obsolescence: Studies in language contraction and death*: 181–196. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duff, Wilson. (1997) *The Indian history of British Columbia: The impact of the white man (new edition)*. Victoria: Royal British Columbia Museum.
- Dorian, Nancy C. (1994) Varieties of variation in a very small place: Social homogeneity, prestige norms, and linguistic variation. *Language* 70: 631–696.
- Enrico, John. (1995) Haida place names. Ms. Skidegate: Haida Gwaii Museum.
- (2003) *Haida syntax*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- (2005) *Haida dictionary: Skidegate, Masset and Alaskan dialects*. Fairbanks / Juneau: Alaska Native Language Center / Sealaska Heritage Institute.
- Harrison, Charles. (1922) *Ancient warriors of the North Pacific: The Haidas, their laws, customs and legends, with some historical account of the Queen Charlotte Islands*. London: H. F. & G. Witherby. (Excerpt in: Charles Lillard (ed.), (1984) *Warriors of the North Pacific: Missionary accounts of the Northwest Coast, the Skeena and Stikine Rivers and the Klondike, 1829–1900*: 127–183, Victoria: Sono Nis Press.)
- 堀 博文 (2008) 「理想の正書法に向けて—ハイダ語 (北米先住民諸言語) の場合」, 『アジア研究』 第3号: 1–20. (静岡大学人文学部「アジア研究プロジェクト」).
- Krauss, Michael E. (1997) The indigenous peoples of the north. In: Hiroshi Shoji and Juha Janhunen (eds.), *Northern minority languages: Problems of survival*. Senri Ethnological Studies 44: 1–34. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Lawrence, Erma (comp.) (1977) *Haida dictionary*. Fairbanks: The Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- Levine, Robert D. (1977) The Skidegate dialect of Haida. Ph. D. dissertation. New York: Columbia University.
- Morley, Alan. (1967) *Roar of the breakers: A biography of Peter Kelly*. Toronto: The Ryerson Press.
- Murdock, Peter. (1934) *Our primitive contemporaries*. New York: MacMillan.
- Nuu-chah-nulth Tribal Council. (1996) *Indian residential schools: The Nuu-chah-nulth experience*. Nuu-chah-nulth Tribal Council.
- Sasse, Hans-Jürgen. (1992) Language decay and contact-induced change: Similarities and differences. In:

Matthias Brenzinger (ed.), *Language death: Factual and theoretical explorations with special reference to East Africa*: 59–80. Berlin: Mouton de Gruyter.

Statistics Canada. (2007) Various languages spoken (147), age groups (17A) and sex (3) for the population of Canada, Provinces, Territories, Census Metropolitan Areas and Census Agglomerations, 2006 Census – 20% Sample Data (table).

Swanton, John R. (1905a) *Contributions to the ethnology of the Haida*. Memoirs of the American Museum of Natural History, Vol. 8, Part 1. Leiden: E. J. Brill.

——— (1905b) *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. Bureau of American Ethnology Bulletin, No. 29. Washington, D.C.: Government Printing Office.

van den Brink, Jacob Herman (1974) *The Haida Indians: Cultural change, mainly between 1876–1970*. Leiden: E. J. Brill.

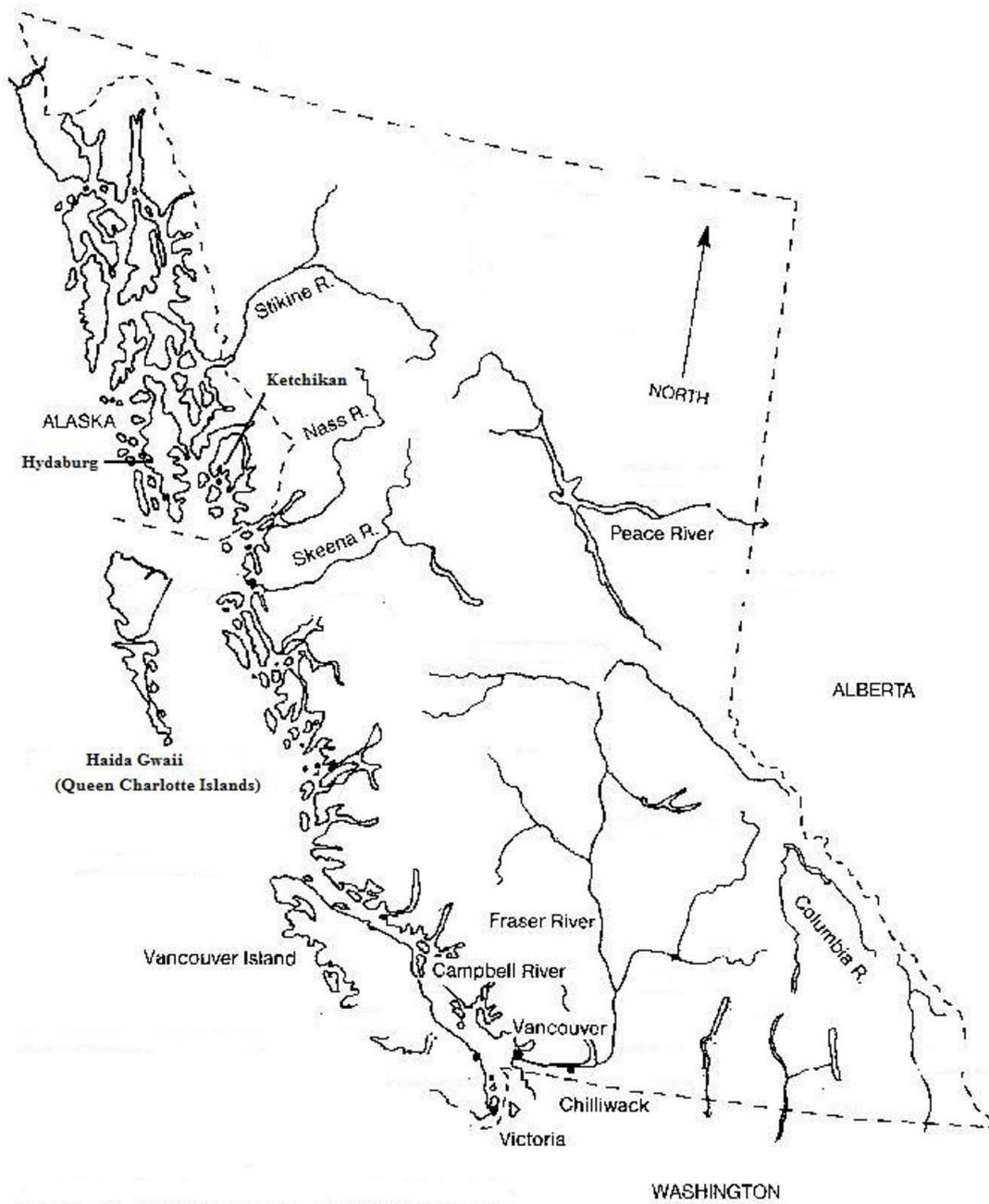
略号

DEF definite; EVD evidential; FOC focus; INTER interrogative; PL plural; REF reflexive

本稿は、科学研究費（基盤研究 (C)）「カナダ北西海岸地域諸言語の形態統語法に関する記述的研究」（研究代表者：堀 博文，課題番号：25370470），同（基盤研究 (B)）「北アメリカ北西海岸先住民諸語の自然談話における複文の調査研究」（研究代表者：渡辺己，課題番号：23401024）の援助による研究成果の一部である。

【図1】北アメリカ北西海岸地域

(<http://yellowmaps.com> をもとに作成)



【図2】ハイダ島（カナダ）

(<http://archive.ilmb.gov.bc.ca/slrp/lrmp/nanaimo/haidagwaii/plan/maps.htm> をもとに作成)

